

English Garden 第56話

"In a perfect circle the sky curved down to the level land, and the wagon was in the circle's exact middle."

Laura Ingalls Wilder

「馬車は、ぐるりと空に囲まれた丸い地平線の大きな輪の真ん中にあるようだった」 ローラ・インガルス・ワイルダー

上はローラ・インガルス・ワイルダー(1867-1957)の「インガルス一家の物語」の2作目"Little House in the Prairie"('大草原の小さな家')の一節で、西部に向かうローラ一家が、ウィスコンシン州の「大きな森の小さな家」("Little House in the Big Woods"第1作目)を出て、アイオワ、ミズーリを経てカンザス州に入ったときの描写です。父、母、姉のメアリー、ローラ、赤ちゃんのキャリーという一家5人の、幌馬車での旅でした。

この時代はちょうど南北戦争が終わって西部の開拓が急ピッチで進んだところで、とうさんも移住者が増えたこの森を出て、まだ人の少ない西部に行きたかったのです。

カンザスはどこまでも続く平らな土地で、一面に丈の高い草が生えて風にそよいでいました。一行はその中を旅していきますが、何日経っても見えるのは風に波立つ草と、とてつもなく大きな空ばかりです。ローラは次のように描写しています。



Next day the land was the same, the sky was the same, the circle did not change. Laura and Mary were tired of them all. There was nothing new to do and nothing new to look at.

次の日も地面は同じ、空も同じ、丸い地平線も変わらない。ローラとメアリーはすっかり飽きてしまった。することも見ることも、新しいものは何もないのだ

何日も幌馬車の中で寝泊まりして旅を続けたのち、ようやく家を建てる場所が決まりました。そこはインディアン・テリトリーの中の川の近くですが、やがて白人移住者に解放されるということでした。とうさんは川床に流れついた丸太を運んできました。まず地面に長方形の溝を掘り、そこに刻み目を入れて平らに組み合わせた太い丸太を半分埋めて土台を作り、次は壁になる丸太にも刻み目を入れてしっかり組み合わせて積んでいくなど、作業のようすが丸太小屋を作るテキストのように克明に描かれています。

このシリーズの物語の中には、とうさんから料理用ストーブ(オープン)をプレゼントされて かあさんが大喜びする場面があったり、ブタを屠殺してから解体して食品に仕上げるまでの工程や、カエドの木に穴をあけて樹液をとり、メープル・シロップを作る方法、パンの焼き方やフライドポテトの作り方などもくわしく述べられており、物語とはまた違った興味をそそられます。その部分をまとめた「大草原の小さな家の料理の本」(バーバラ・M・ウォーカー著、本間千枝子・こだまともこ共訳、文化出版局)も出版されています。それによると、暖炉の火での料理がオープンに変わったのは 料理史上でも大きな出来事だったようで、丸太小屋でローラがそれを体験したのは実にすばらしいことだったので。

ローラ一家はこの草原の家から1年ほどでまた出ていくことになりました。インディアン・テリトリーが白人に解放されなかったためでした。

この作品について私が残念に思うのは、アメリカ先住民(インディアン)に対する偏見です。インディアン・テリトリーに住んでいるのですから当然先住民に出会います。とうさんはある程度理解を見せているものの、かあさんの目からは礼儀もわきまえない嫌われ者として描かれています。征服された先住民が多少でも権利を主張できるようになったのは 1960年代になってからですので、当時の白人の意識としては仕方ないことかもしれませんが、いまこの本を読むときには注意することが必要であると思います。